

# 地盤工学会におけるダイバーシティの実現

Promotion of Gender Equality and Diversity Management in the Japanese Geotechnical Society

桑野 玲子 (くわの れいこ)

男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会 委員長, 東京大学生産技術研究所 准教授

## 1. はじめに

毎年の地盤工学研究発表会で、男女共同参画およびダイバーシティに関するセッションを 2005 年以来継続して開催している。今年は、“地域に根ざしたダイバーシティ”というテーマで、開催地周辺で活躍の方々を中心に焦点を当て、土木学会、土木技術者女性の会との共催で一般公開の特別セッションを実施した。

## 2. セッションの概要

特別セッションは、大会 1 日目の 7 月 14 日午後に行われた。参加者は 40 名弱であり、例年よりやや少な目であった。参加者に対して実施したアンケート調査によると（男性 15 名、女性 9 名）、幅広い年代、および職種の方々にご来場いただいていることがわかった。

### 2.1 地盤工学会におけるダイバーシティ推進

男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会の活動も 3 年目となり、様々な取組みを実行に移している。そのひとつが昨年の研究発表会で初めて開催し好評を得た女性会員交流会のサロン土カフェ W である。お茶とお菓子を囲みながら会員の相互交流を図っていただく企画で、今年は当日の飛び入り参加を可とし、男女関わらず周辺を歩いている方々を積極的に会場に誘い込む作戦を取ったところ、30 名ほどの参加がありたいへん盛況であった。

その他、会員支部部で昨年度から時限付で施行しているダイバーシティ促進のための会費減免措置について紹介した。これは、20 代以下の若手会員（半額）、30 代の女性会員（半額）、身体に障害を有する会員（全額）、産休・育休取得中の会員（全額）を対象に、年会費を減免する制度である。地盤工学会の会員構成（2012 年 6 月現在）は図 1 に示すように 20 代の会員が著しく少なく、地盤工学会の 10 年後、20 年後が危ぶまれる状態となっている。また、女性会員比率も一見して少ない。学生会員の方々には卒業後も継続していただけるように、若手技術者の方には負担少なく入会していただけるように配慮し、将来の地盤工学会を支えてくれる人材の確保を狙っている。現在本制度の利用者（自己申告制）は、半額免除：189 名、全額免除 38 名である。

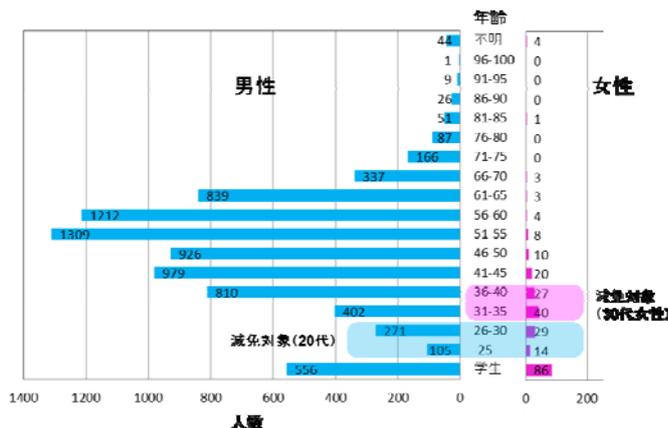


図-1 地盤工学会の会員構成（2012年6月）

### 2.2 若手女性会員のロールモデル

函館高専の片岡沙都紀氏に、若手女性会員のロールモデルとして、これまでのキャリアを振り返っていただくと共に高専でのダイバーシティの現状をお話いただいた。片岡氏は、工業大学学生～高専教員という経歴を辿ってきたため、常に少数派の立場であったはずであるが、学生時代



写真-1 片岡沙都紀氏

は不自由を感じる事はなかったという。もとより博士課程で研究対象としていたメタンハイドレートの研究プロジェクトは多国籍メンバーからなるチームで取り組み、ダイバーシティが自然に創出されていたのであろう。また、女子学生が少ない環境では、学科を超えた女子学生の交流が深まり、いわゆる同期の女子学生どうしたいへん仲が良かったという。少数派故に結束が高まるというのはメリットといえるであろう。しかしながら高専では、女性教員が極端に少ないことから、他学科を含めた女子学生対応など様々な仕事が集まり、職場内に相談できる女性教員の先輩がいないという固有の悩みを抱えている。これを乗り越えるきっかけとなったのが、女性土木技術者のネットワークである土木技術者女性の会で様々な先輩の話を聞いた事だそうである。多くの人に助けられてここまで来た事を感謝し、今後は後進を助ける側としても貢献したいという決意が感じられた。

## 2.3 大学におけるダイバーシティ

室蘭工業大学の木幡行宏教授より大学における男女共同参画推進の取り組みについてお話しいただいた。全国の大学の中で女性教員比率が最低ということで、そのまま放置しては大学全体の評価にも影響しかねないという危機感から、学長の特



写真-2 木幡行宏氏

命を受けて男女共同参画推進室長として取り組んでおられるとのことである。工業大学はもともと女子学生が少ないので、女性研究者、女性教員として成長する母数も少ない。事実、前述の女性教員比率ワースト10の中には工業大学が大半を占めている。室蘭という場所も、工業都市のイメージが強いためか、遠方からの応募者に対する吸引力に欠けるようである。女子学生寮を建設したり、女性教員の採用枠を増やしたりと、入れ物や仕組みを作って手を尽くしているが、肝心の応募者が無く、なかなか顕著な功を奏しないということである。もはや一大学だけで解決できる問題を超越、大学間のネットワークはもとより、学会を含めて多方面からの支援が必要と感じた。

## 2.4 ワークライフバランス

3歳の息子さんを育てながら青森県庁に勤務されている藤森由美子氏からは、ご自分の育児経験を通して、家庭と仕事の両立に関する考えをお話いただいた。出産・育児により長期の休暇を取らざるをえないことについて心配していると、先輩から「出産には準備(妊娠)期間がある」とアドバイスされ、気が楽になったという。確かに、子供は突然産まれるわけではないので、本人も家族も職場の同僚にとっても、少なくとも数ヶ月の準備時間があるのだと前向きに捉えることができるであろう。どんなに準備したとしても、生まれてみればその時々で乗り越えなくてはならない不測の事態も多いのは事実ではあるが(東日本大震災では、藤森さんもお子さんを預けて震災対応に奔走したとのこと)、ワークライフバランスは実践していくうちにその人なりのやり方が身についてくるのだと思う。出産か仕事かで迷っている人へのアドバイスとして、



写真-3 藤森由美子氏

・事前に準備が可能＝周囲への迷惑を最小限にできる  
・積極的な人脈づくり＝悩みを解決するヒント有  
というメッセージをいただいた。

## 2.5 八戸シビルレディの取り組み

八戸工業大学の東田彩乃氏から、八戸工業大学環境建設工学科の女子学生が中心となるネットワーク(Hachinohe Civil Lady:HCL)についてご紹介いただいた。八戸を中心に勉強会や見学会などを行い、北東北における女性土木技術者のネットワーク形成の拠点として期待される。



写真-4 東田彩乃氏

## 2.6 討議・意見交換

会場からの討議・意見交換をいくつか紹介する。

・以前に比べて、ワークライフバランスへの取り組みが個人の努力から組織の対応へと進化したのを感じる。また、いろいろな所でネットワークが生まれているが、このような動きを把握しているところはあるのか？

→ 各所で自発的にネットワークが形成されているので、把握しきれていないわけではない。ネットワーク同士の情報交換や共有などで学会の場が利用できるようにお手伝いしたい。

・少数派に役割が集中することによる負担感はないか？  
→ 負担が集中することはある。しかし、自分が貢献できるという充実感もあり、前向きに考えている。

・ワークライフバランスの実践には、技術者・研究者の評価のあり方が切り離せない問題である。長時間労働～労働時間に応じた成果～評価と連鎖することを考えると、行き過ぎた成果主義がワークライフバランスの実践の障害となりかねない。

→ 難しい問題。しかし、組織によっては長時間労働への偏重は徐々に改善している。

## 3. ダイバーシティ推進に向けて

男女共同参画・ダイバーシティ特別セッションは今年で8回目になる。学会にとってのダイバーシティ推進の意義については繰り返して訴えているところであるが、ダイバーシティ(多様性)という言葉のわかりにくさもあってまだまだ浸透しているとは言えない状況である。地盤工学会が様々な立場の方にとって役に立ち個性を生かせる場であるために何ができるか、これからも考えていきたい。来年の研究発表会(富山)に向けて、北陸支部では女性技術者のネットワーク「雪割草の会」が結成され、活動を開始したということである。それぞれの地域でネットワークができ、学会をきっかけに交流が深まるのはたいへんうれしいことである。また、今秋、若手会員にご参集いただき、ワールドカフェ方式(共通のテーマで、小グループに分かれ、一定時間ごとに相手を変えて議論する方法)で、地盤工学会の魅力向上策について話し合う予定である。詳細は別途告知するので、(自称)若手会員の方々には積極的な参加を期待したい。

(原稿受理 \*\*\*\*. \*\*. \*\*)

## 「サロン・土・カフェ W」開催報告

Meeting Report of "Salon"土"Cafe W"

杉本映湖 (すぎもと えいこ)

(株)ダイヤコンサルタント ジオエンジニアリング事業本部(男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会)

セクション区切り (現在の位置から新しいセクション)

7月に八戸工業大学にて行われた「第47回地盤工学研究発表会」の初日に、男女共同参画およびダイバーシティに関する委員会は「サロン・土・カフェ W」と称する懇親会を開催した。これは数少ない女性会員の横のつながりを深めることを目的とした催しで、昨年が続いて2回目の開催であった(口絵写真〇〇)。

今回のサロン・土・カフェ Wは29人の参加者に恵まれた。参加者の内訳は男性10人、女性19人で、幅広い年代の方々にご参加頂いた。

始めに簡単な自己紹介を行い、その後はワールド・カフェ方式での自由なおしゃべりの場とした。4人ずつが1つのテーブルに座り、20分間、自由におしゃべりを楽しんだ後にメンバーをシャッフルして、新たなメンバーで会話を楽しむということを3回繰り返した。ワールドカフェ方式を採用したことで、より多くの方々と交流を持って頂けたと思う。この20分という時間は非常に短く

感じられ、筆者自身、「もっとおしゃべりしていたかった」という気持ちが残っている。この「物足りなさ感」が参加者の皆様の心に「楽しかった、また来年も参加したい」という思い出として残ることを願う。

サロン・土・カフェ Wでは、様々な立場、年代、性別の方々(これこそダイバーシティ)が楽しいおしゃべりを通して、悩みを共有し、解決の糸口を見つけ、さらには、新しい視点を得ている。会員同士のつながりを形成し、今後の地盤工学会の発展に寄与するための、まさに「サロン」として機能していると感じている。今後も継続的に開催し、会員同士のつながりの輪を拡げたいと思う。なおサロン・土・カフェ Wの開催に際しては、大会実行委員会の皆様に多大なご尽力を頂きました。また、当日は、参加者の皆さまが、たくさんの美味しいお菓子を差し入れてくださいました。この場をお借りしてお礼申し上げます。



口絵写真 サロン・土・カフェ Wの様子—歓談中—



口絵写真 「サロン・土・カフェ W」を終え、皆で記念撮影